

キク親株の灌水同時施肥栽培によるさし穂の長期生産

農業研究センター 農産園芸研究所 花き部
担当者 :金子 英一

研究のねらい

キクの周年生産では同一品種を長期にわたり生産しており、さし穂も長期に安定的な供給が必要である。通常の土耕栽培に比べ、ロックウール栽培ではさし穂の生産性が高く、同一株からの長期生産が可能とされているが、ロックウール栽培は施設費等の問題がある。このため、ロックウール栽培より導入が容易な灌水と施肥を同時に行う灌水同時施肥による土耕栽培でのキクの親株栽培について検討し、さし穂の長期生産化を進める。

研究の成果

- 1 秋キク親株の灌水同時施肥栽培は、慣行の土耕栽培より6割程度さし穂の生産性が高く、6月上旬定植で7月から1月までの長期のさし穂生産が可能である。
さし穂の生産量は10月までは徐々に増加しその後は減少する。
特に「秀芳の力」では12月には吸枝が発生し、さし穂生産の減少は著しい。
- 2 施用する液肥濃度は、N濃度で150ppm程度とし、点滴チューブを用いて施用する。
幅85cmの床では20cmピッチの点滴チューブを2本設置する。
施用量は夏期の晴天時は1日当たり4リットル/m²、冬期の晴天時は2リットル/m²程度とし、過乾燥、加湿とならないよう天候に応じ、施用量を調整する。
この場合、土壌溶液のECが2.5mS/cmを超えないように液肥濃度を調整する。
- 3 さし穂の生産量はわずかに地床栽培が多い。
生産されたさし穂の垂さやその穂を用いた切り花生産での切り花の品質は隔離床栽培と地床栽培の差はみられない。
- 4 親株の栽植密度は、幅85cmの床で未間20cmの4条植の場合、スプレーギクで株間15~20cm、輪ギクでは、株間15cmが面積当たりのさし穂の生産量が多い。
- 5 長期に採穂を続け、1月に採穂したさし穂を用いた切り花生産でも柳芽の発生は見られない。

普及上の留意点

- 1 地床栽培で液肥を過剰に施用すると塩類集積や環境汚染につながるので注意が必要である。
- 2 採穂する側枝に残す節数が多いと、親株の草丈が高くなりすぎるので注意する。

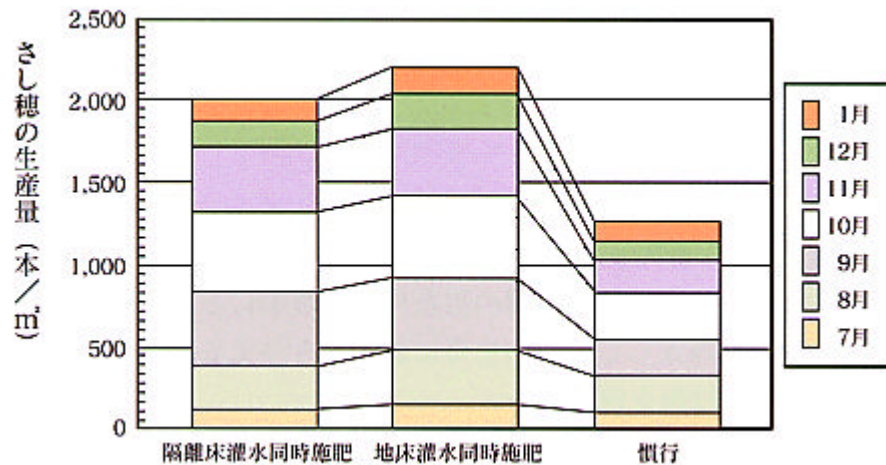


図1 栽培方法がさし穂の生産量に及ぼす影響（秀芳の力）

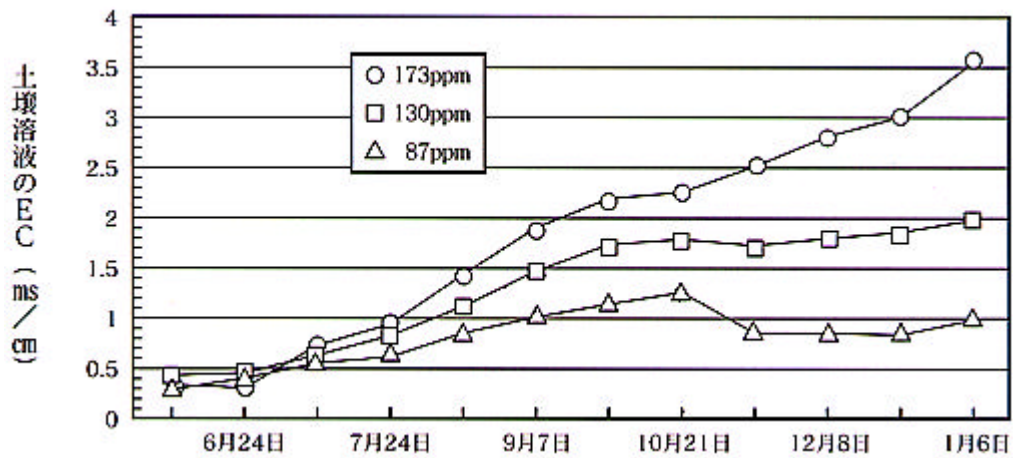


図2 灌水同時施肥栽培における液肥N濃度が土壌溶液にECに及ぼす影響
 （大塚ハウス肥料のA処方の倍率 N濃度173ppm:2/3倍、130ppm:1/2倍、87ppm:1/3倍）

表1 親株の栽培床の違いと栽植密度（株間）がさし穂の生産量に及ぼす影響

栽培床	株間	シャープ		秀芳の力	
		10株当たり	m ² 当たり	10株当たり	m ² 当たり
隔離床	15cm	1,115本	3,615本	624本	2,018本
	20cm	1,460本	3,436本	670本	1,577本
地床	15cm	1,198本	3,750本	695本	2,180本
	20cm	1,507本	3,547本	680本	1,600本